



ジョイタム株式会社

電気部品製造業。モットーは「お客様の声を聞く」で、全国のみならず海外へも積極的に出向き、常に顧客の声に耳を傾けている。社員の7割が女性で、女性リーダーも多数活躍中。



何よりの楽しみは社員の成長

橋野 ●ジョイタムさんには、100名以上の社員の方がいらっしゃるんですよね。ここまでど

原点かもしれませんが。売れる、すなわち誰かに必要とされるモノは何だろう…とひたすら突き詰めていった結果が、「唯一無二」でした。既にある商品をアレンジするのではなく、これまでにはなかったまったく新しいモノを生み出していきたいのです。

のようにして大きくしてこれたのですか？
田村 ●実は、別の会社の社員をそのまま受け入れたのです。鹿角工場が閉鎖することになり、100名が失業の危機にさらされていました。一社員として「どうにかしなくては」と市長やハローワークにかけ合ううちに、「力を貸すから、田村さんが会社を興したらどうか」と言われて…。社長になるつもりなどなかったのですが、54歳の時にジョイタムを設立しました。
橋野 ●そのまま今日まで雇用を続けているのですか！すごいこ



アートフォルム有限公司

家具や工芸品を作る木製品工房。美しい造形と木のぬくもりを感じられる唯一無二の作品は、世界でも高く評価されている。靴べらのセットは宮内庁御用達の品。



故郷の鹿角に帰ってきたのは自然の摂理

対談

アートフォルム有限公司 代表取締役
橋野 浩行

ジョイタム株式会社 代表取締役
田村 功

03

鹿角に密かに眠る可能性とは何か？

田村 ●靴べらセットが宮内庁御用達となったり、櫛がグッドデザイン賞を受賞したりと、橋野さんはすっかり鹿角の有名な人ですね。一度鹿角を出ているそうですが、どうして戻って来ようと思ったのですか？

橋野 ●自分にとって、それが一番自然なことのような気がしたからです。生まれた場所に帰るというのが当然の流れのように感じられて。実際に戻ってみて、鹿角はモノづくりにとはとても向いていると思いました。都会は刺激的で

が、たくさん情報に惑わされてしまうことも多い。一方、ここは刺激は少ないかもしれないですが、裏を返せば静かで集中できるということ。鹿角には、じっくり自分と向き合うことができる。余白。があるんです。

田村 ●とはいえ、帰ってきた当初は不安もあったのではないですか？

橋野 ●そうですね、正直なところ生活は厳しかったんです。家族にも迷惑をかけてしまいました。一日中閉じこもって作業をしていたので、周囲の人からは「家から出ずに何をしているのか？」と思われていたでしょう。賞を獲るなどして、仕事が広く理解されるようになったのはまだ最近のことです。アートフォルムを立ち上げて25年経つのですが、ようやくスタート地点に立つ気がしますね。

田村 ●この櫛、見た目にも美しいですが、触れてみると何とも言い難い魅力がありますね。モノ作りにおいて、どんなことを大切にしているのですか？

橋野 ●「世界にないモノを」といつも考えています。以前家具製造会社で新商品開発をしていました。勤めていた時、とにかく「売れるモノを作れ」と言われていて、それが私の



1 アートフォルムの作品です。海外の有名ブランドから発売されることになった木製のペン。「手に馴染みますね」と田村さん。2 宮内庁御用達となった靴べらとスタンドのセット。木目が美しい斧折櫛を使っています。

と思います。
田村 ●そうなんです。一人一人が成長していけば、自ずと会社も成長しますから。20歳の時、人生の目標を考えました。家や車など欲しいものはたくさんあったのですが、「どれも一度手に入ったらおしまいじゃないか」とふと気づきました。じゃあ、何をを目指すのかといえ、自己成長だと思ふのです。ですから、社員にも成長し続けてほしいです。そういう人が増えれば、会社も町も元気になるんですよ。革新を続けてきた橋野さんは、生き方自体がお手本かもしれないですね。

橋野 ●初めてニューヨークへ行った時、日本とは何もかもが違っていて衝撃を受けました。いろいろな場所、人と出会って、視野を広げてほしいですね。
田村 ●ええ。鹿角には、頑張った分必ず報われる風土があると思います。意欲を持って取り組めば、必ず、何かひとつを成すことが出来る場所ですよ。



対談にご登場いただいた全20社のドキュメンタリー映像を公開しています。